

「工芸表現と現代美術との関係性」

大阪芸術大学 工芸学科 准教授 長谷川政弘

現代において「工芸」という芸術分野は、絵画や彫刻と違って一言で語れない部分が多い。

絵画、彫刻には「使う」という用途はなく、ただ鑑賞することのみなのだが、一般的に言われる「工芸」とはそこには用途が含まれてくる。そこがファインアートとの大きな違いだと言われてきた。しかし現代の工芸作品において、用途をなくし鑑賞だけが目的の作品は数知れない。現代の「工芸」という領域に身を置くものにとって一括りに使われる「工芸」という言葉はイメージ的に拘束力が強く窮屈な感じを持つ。今日では工芸技法をベースとしたファインアート作品が数多く存在し、現代美術と深く関わりあっている。私が今工芸という領域に身を置き、生み出している作品は、工芸技法を使ったファインアートだと考える。現代社会において「用」をなくした「工芸」はこれからどこへ向かって行くのか。その工芸の一つの方向性をより明確に検証して行くことをこの研究の目的とする。

上記は、今回の研究目的のために掲げた文章である。現代の工芸において一つの方向性である「工芸表現と現代美術の関係性」を探るために、漆を扱う栗本夏樹氏と陶を扱う三木陽子氏に協力を仰いだ。両氏は40年近く一つの素材にこだわりつつ、工芸の枠にとらわれず現代美術に目を向けて制作を続けてきたベテラン作家である。若干の考え方の違いがあるものの大きな部分で共通するところが多い。今回この御二方と私を加えた三名で、伊丹市立工芸センターという公的な場所で作品展示とトークセッションの場を設けていただいた。

私は、今回の試みのために鉄を素材に、蓮をモチーフにしたインスタレーション作品「暝色の庭」を制作した。蓮は10年以上前から取り組んできたモチーフである。では何故蓮をモチーフにするのか？それは私にとって深い意味がある。

まずは蓮の造形的な魅力である。蓮の葉は、面と線だけで構成される極めてミニマルな形をしている。細い茎に大きな面積の葉を持つにも関わらず、強い風雨にさらされても倒れることなく立っている。このしなやかで強靱な構造と生命力は、多くの植物の中でも私を引きつけるだけの十分な魅力がある。

次に、蓮にまつわる日本人としての文化的、宗教的な背景である。私は蓮に極楽と地獄の両面を感じる。夏の湖一面に蓮の葉が咲き誇った極楽浄土のような一面と冬の干上がった湖面に、葉は枯れ落ち、花托の茎は、命が尽きたかのようにうなだれ、そこに冷たい風が吹き抜ける。その殺伐とした光景に地獄のイメージが重なる。しかしその光景とは裏腹に次の新しい生命のために種を落とし、根には栄養を蓄え次の開花を待つ。この自然のサイクルとも言える生命力を表現するには私にとってこれとないモチーフなのである。

「蓮」といういかにも工芸的なモチーフを題材とし、蓮の葉、花、蕾、花托などを制作し、蓮池をイメージさせるようインスタレーションという現代美術の手

法で展示を行った。インスタレーションとは作品を単体として扱うものものではなく展示空間全体を一つの作品として捉えるものである。これは一般にいう「工芸作品」とは一線を画する表現方法である。制作技法は鍛造、鍛金を主とし、それを溶接や鑽付けで接合する方法をとった。こちらは極めて工芸的な制作方法である。

現代美術というジャンルにおいて作品を成立させるにはまず、コンセプトをはっきりとさせる必要がある。作品タイトルは「暝色の庭」である。暝色とは夕暮れから日没にかけての暗い色のことである。下記の文章は作品発表のために書いた文章である。

朱に染まった夕焼けの後、
消えゆる朱とから闇が混じり合い、暝色の刻が始まる。
鉄の持つ表情には暝色の全ての色が含まれている。
移ろい行く景色、この美しさにまさるものはどこにあるだろうか？
この美しさは瞬間ではなくわずかな時間を持っている。
その中で景色は刻々と変化する。
光から解放され、やがて夜が始まる。
この感覚は、絵画ではなく三次元の彫刻に近い。
一瞬、一断面ではなく時が刻まれる時空を感じる感覚。
それが暝色の刻と言えよう。

以上が今回の研究のために私が制作した作品の概要である。

一ヶ月以上の展示期間中に、様々な立場の来場者の方々と現代の工芸について語り合い、現代美術の専門家である国立国際美術館の中井康之氏を招いての2時間にも及ぶトークセッションの中から現代の工芸としてのあり方や必要性が見えてきた。

工芸表現で現代美術に関わるということに必要な事は、作品の表面的な美しさや制作技術とは別に、何のために作品を制作したのかという作家としての考え、作品の奥に見える思想、すなわちコンセプトが必要であるということ。その他、工芸素材の違いによる表現方法の違い、歴史を含めた制作環境などの相違点。そして今後自分自身が取り組んでいかなければならない次なる研究課題として「工芸から派生した現代美術作家」や「金属素材とファイバー素材の類似性」など、今回の研究から新たな二つの研究課題が見つかり大変有意義な結果を得ることができた。

今回の伊丹市立工芸センターでの展示作品とトークセッションの内容は、研究報告冊子にまとめることができた。この研究記録が現在の工芸分野の一断面として、これからの工芸家を目指す学生たちや、若手工芸家たちにとって少しでも制作や思考の手がかりになれば幸いである。